



近年の津波避難時の調査結果をもとに，災害発生時の避難のあり方を話し合ってみましょう。

近年の津波避難時の行動・意識			
地震名	千島列島東方の地震	千島列島東方の地震	東北地方太平洋沖地震
地震発生年月日時分	2006年11月15日20:14	2007年1月13日13:23	2011年3月11日14:46
マグニチュード	7.9	8.2	9.0
津波警報の種類	津波	津波	大津波
最大津波高(観測所)	0.84m(三宅島坪田)	0.43m(三宅島坪田)	19.6m(南三陸町志津川)
死者・行方不明者	なし	なし	18,456名(警察庁)
調査場所(サンプル数)	根室市，網走市，釧路市(600名)		岩手県，宮城県，福島県の沿岸地域(870名)
避難率※ <sup>1</sup>	46.7%	31.8%	57%
避難したきっかけ(複数回答，上位3つ)※ <sup>2</sup>	①津波警報を聞いたので(67.9%) ②市や町が避難を呼びかけたため(50.0%) ③家族が避難しようと言ったので(39.3%)	①津波警報を聞いたので(57.4%) ②市や町が避難を呼びかけたため(50.0%) ③家族が避難しようと言ったので(42.6%)	①大きな揺れから津波が来ると思ったから(48%) ②家族または近所の人が避難しようと言ったから(20%) ③近所の人が避難していたから(15%)
避難しなかった理由(複数回答，上位3つ)※ <sup>3</sup>	①そのときいた場所が危険とは思わなかった(54.0%) ②防波堤や防潮堤を越えるような大きな津波は来ないと思った(36.8%) ③根室などで来襲した津波の高さが0.4m程度という放送を聞いたので(29.9%)	①そのときいた場所が危険とは思わなかった(43.4%) ②2006年に津波警報が出たが，たいした津波が起きなかったため(34.5%) ③防波堤や防潮堤を越えるような大きな津波は来ないと思った(21.2%)	①自宅に戻ったから(22%) ②家族を探しに行ったり，迎えに行ったりしたから(21%) ③過去の地震でも津波が来なかったから(11%)
津波警報を見聞きした割合※ <sup>4</sup>	82.2%	81.2%	83%
津波警報の入手手段(複数回答，上位3つ)	①NHKテレビから(70.3%) ②民放テレビから(50.0%) ③市の広報車から(25.0%)	①NHKテレビから(61.6%) ②民放テレビから(42.0%) ③市の広報車から(24.6%)	①防災無線から(52%) ②ラジオから(17%) ③消防の車や人から(7%)
避難指示等を見聞きした割合※ <sup>5</sup>	78.3%	65.3%	45%
避難指示等の入手手段(複数回答，上位3つ)	①NHKテレビから(58.9%) ②市の広報車から(49.6%) ③民放テレビから(31.2%)	①NHKテレビから(51.4%) ②市の広報車から(50.5%) ③民放テレビから(27.9%)	①防災行政無線から(45%) ②消防車や人から(22%) ③ラジオから(10%)
避難に関する特記事項	2006年に避難した人は約半数(46.7%)であり，2007年は31.8%である。避難しなかった理由として，2007年には「2006年の津波がたいしたことなかった」が約30%となっている。		

※1東北地方太平洋沖地震の避難率は直後避難(揺れがおさまった直後にすぐに避難)の割合  
 ※2東北地方太平洋沖地震では，直後避難をしたきっかけから抜粋 ※3東北地方太平洋沖地震では，すぐに避難しなかった理由から抜粋  
 ※4東北地方太平洋沖地震では，大津波警報を見聞きした割合 ※5東北地方太平洋沖地震では，避難の呼びかけを見聞きした割合  
 (出典：東北地方太平洋沖地震を教訓とした地震・津波対策に関する専門調査会第7回会合資料及び参考図表〔中央防災会議〕より抜粋)

防災知識

「警報の空振り」を「よかった」と思えるように

「千島列島東方の地震」が起きました。その際，津波警報が発表されましたが，住民の避難率は2006年の地震が46.7%，2007年の地震では31.8%とさらに低下しました。

2007年の地震で避難しなかった住民の理由は，「津波警報が出たが，結局2006年の津波はたいしたことがなかったから」でした。もしかすると今後も「逃げなくてよかった」と思う「警報の空振り」が何回も発生し続けるのかもしれませんが。

しかし，いつか本当に津波が来たときに「逃げておけばよかった」と思うことになるでしょう。警報がはずれて「逃げなくてよかった」と思うことは，将来津波に遭うことに直結していることになります。

私たちが自分の命を守るためにできることは，警報がはずれる可能性があっても逃げることです。

もし警報がはずれたとしても「津波が来なくてよかった」と考え，いつか津波が来たとき「逃げてよかった」と思えることが大切です。

自分の命を守るための最大の敵は，「自分自身」なのかもしれません。

(出典：『人はなぜ「自分は大丈夫」と思うのか，防災研究家の片田群馬大学教授に聞く』nikkeibpITpro)



災害時に陥りやすい人の心理

人は，危険や脅威を軽視したり，事態を楽観視したり，「自分だけは大丈夫」と錯覚するような心理状態になることがあります。このような心理状態は災害発生時にも起こりうることで，誰もがなりうる可能性があります。この災害時に陥りやすい心理状態にはどのようなものがあるか知っておきましょう。

正常性バイアス

※バイアス：考え方や意見に偏りを生じさせるもの

異常事態に遭遇したとき，「こんなはずはない」と思ったり，危険が予想される状況でも「自分は大丈夫」と思って，自分にとって都合の悪い情報を無視し，過小評価してしまう心理的特性を，「正常性バイアス」といいます。

人は，危険を感じると強いストレスを感じます。しかし，強いストレスはできるだけ避けたいと考えるので，無意識のうちに，危険を見て見ぬふりをしてしまいます。

つまり，千島列島東方の地震発生時の「避難しなかった理由」は「正常性バイアス」がはたらいっている心理状態といえます。

多数派同調バイアス

「逃げるほど大変な事態なら，周りの人がきっと大騒ぎをするはずだ。でも，みんな静かだから大丈夫だろう」と考える大勢の人がいると，とりあえず周りに合わせようとする心理的特性を「多数派同調バイアス」といいます。

緊急時，人は一人でいると，自分の判断で行動を起こします。しかし，周りに人がいると「みんなでいるから」という安心感で，緊急行動が遅れる傾向にあります。また，自分だけが他の人と違う行動をとりにくくなり，お互いが無意識にけん制し合い，他者の動きに左右されてしまいます。それは結果として逃げるタイミングを失ったり，せっかく逃げたのに引き返したりすることにもなりかねません。

みんながいるから大丈夫なのではなく，みんながいるからみんなの行動に流され，危険にさらされる場合もあります。

東日本大震災でも，「家族や近所の人が大丈夫だ」と言ったから，すぐに避難しなかったという事例もあり，「多数派同調バイアス」がはたらいっている心理状態といえます。



災害発生時，バイアスがはたらく心理状態になることを防ぐためには，どのようにしたらよいのでしょうか。